（様式１）

視　察　報　告　書

平成２７年６月１６日

鳥取市議会議長　様

鳥取市議会　文教経済委員会
委員長　平野　真理子

本委員会は、下記により委員を派遣し、行政視察（調査）したので、その結果を報告します。

記

１　期　間	平成２７年４月２１日から平成２７年４月２３日
２　派遣先	熊本県宇城市 山口県萩市 島根県大田市
３　視察内容（調査）	熊本県宇城市 ・いじめ・不登校対策について ・家庭の教育力向上の取り組みについて 山口県萩市 ・道の駅「萩しーまーと」との取り組みについて （水産物のブランド化について） ・道の駅の管理運営について 島根県大田市 ・農業担い手支援センターについて
４　派遣委員の氏名	平野真理子　委員長 岡田　信俊　副委員長 米村　京子　委員 星見　健蔵　委員 伊藤　幾子　委員 寺坂　寛夫　委員 長坂　則翁　委員 上杉　栄一　委員
５　委員会所見	別添のとおり
６　参加者所見	別紙のとおり

（別添）

視 察 先	熊本県宇城市
調査項目	いじめ・不登校対策について 過程の教育力向上の取り組みについて
（所見）	・いじめや不登校など子供たちの環境は多くの問題を抱えている。特に川崎市の中１男子のいじめ殺人事件は、あまりにもむごく悲しく、２度と繰り返してはいけない。私たち大人がどう行動すべきかを考えるとともに、本市の教育行政にさらに必要なことは何かを考えるため、宇城市の視察をし、学ばせていただいた。 　特に重要だと感じたのは、自分はいじめられていること、感じている子供一人一人に対し、教師が声をかけ対話していくこと、そして、親と子・親同士の絆づくりを大切にし、支援を行っている点だった。さらに小中のつなぎ目で、しっかりと引き継ぎをして対応しておられるところであった。 ・熊本県は、全国で最も「いじめ」の多い県であった。そこで宇城市では、教職員の研修等もふやし、学校の全教職員で協力し、情報も共有し、お年寄りを主とした地域の方々の協力も得ながら解決に向け邁進されていた。 　学校では、愛の 1，2，3 運動に取り組まれていた。他にも、心の相談員派遣事業や、学習支援サポーター配置事業などにも取り組まれている。他から見て「いじめ」と捉えられない場合でも、本人が「いじめ」と申告すれば相談に乗る、そんな地道な取り組みをされており、現在では「いじめ」の 90%は解消しているとの報告を受け大変感心した。 　この視察で、教師と児童生徒がいかに寄り添い、一人一人にかかわることの大切さや必要性を改めて強く感じた。今回の取り組みを学ぶ中で、鳥取市の「いじめ対策」に役立つヒントを多く頂戴したと感じている。多方面に渡り多くを学べた。 ・いじめ問題は一方方向だけでなく、一人一人違ったさまざまな問題を抱え、いかに学校、担任、地域との密接な関係が大切であるか、また、プライバシーがかかわることで、福祉・教育の情報の共有がいじめの予防対策となっています。 　早期発見すること、複数の目で子供のＳＯＳを検証すること、宇城市いじめ防止５ＡＣＦチェックリスト、心の土台をつくる（マズリーの三角形）等参考になりました。 ・時間を取って一人一人の子供の話を聞いて、経過もしっかりと見ていくことは教師本来の仕事の一つであり特別なことではない。しかし、そのような対応を現実的に困難にさせているのが「教師の多忙化」だと思う。鳥取市において考えればその時間をいかにつくるかという点で、「教員の多忙化」の解消が引き続きの課題であると感じた。 ・本市においても、「子どもしつけ 10 か条」など、子育て・家庭教育の指針やいじめ対策などとして参考になるものであった。

視 察 先	山口県萩市
調査項目	道の駅「萩しーまと」との取り組みについて 道の駅の管理運営について
（所見）	・魚価の低迷、後継者不足など本市と共通の課題があり、萩市の取り組みの中から参考になる点が多くあったと思う。地元が喜ぶ所に人が集まるなど、道の駅の構想につながる点があった。 ・農業や観光などを特色とする道の駅が多い中、水産を前面に出し成功しているケースは大変珍しく、マスコミが取り上げる回数も非常に多く相乗効果になっている。スタッフのたゆまぬ努力やアイデアが随所に見られ感心した。 ・安定的な入客となると地元が対象という発想は非常に大事だと感じた。また、日の目を見ない魚をブランド化したり、道の駅をただの販売所で終わらせるのではなく、さまざまな機能を持たせた施設にしているところは良い点だと思った。また、市職員をしーまーとへ出向させるに当たっては、「商売人になりうる人」を選んでいるという市当局の説明に、やはり適材適所ということは大事だと思った。 ・本市においても、かろいちや道の駅はくとや気高など同様の施設もあり、今後も地域経済の発展と活性化に向け、魚介類のさらなるブランド化やＰＲなどの推進を初めとする、水産業の振興へ向けさらなる取り組みの推進を図る必要性を感じた。 ・本市でも国土交通大臣選定の重点道の駅として神話の里はくと道の駅が指定されたが、新たな視点、新たな発想での道の駅の運営が求められていると感じた。 ・年間利用者数 140 万人、売上高 11 億円は注目するところであり、カリスマ駅長中澤氏の経営力によるところが大きいと感じた。

視 察 先	島根県大田市
調査項目	農業担い手支援センターについて
（所見）	・地域就農の対応では、生活の安定、収入を上げることはなかなか難しいが、人を受け入れる最大の鍵は、本人の根性もいるが、地域の協力や理解が必要であり、地元の温かさ、面倒見の良さである。人に焦点を置いた行政サービスの大切さを感じた。 　産業振興課と地域振興課がワンフロアーで相談に乗り、県と市の補助を組み合わせ結果につながっている。山の中でも借家が足りない状況がある。古い家を買って直して、若者に提供しているなど、人口が減る中、努力し力を合わせている。こうしたことも住んでみたい田舎暮らし日本一になっていると感じた。 ・取り組み事例としては、まずは見てもらおう、との観点から「神々の国しまね就農相談ツアーを平成 24 年より県と協力し開催しておられる。バスツアー形式で関東や関西より就農希望者を募り、農業体験や座学、観光などをパッケージしたものなどがあり、大変な努力を感じた。 ・農業担い手支援は、ばらばらであった窓口を一本化し、県・市・ＪＡとの連携が迅速かつ効率的に対応することの大切さを知ることができた。情報の共有・地域との連携・迅速かつ細やかな目配りを随所にみることができ、核となって携わる人の情熱を感じることができた。また、外部からの知識活力を取り入れた政策は大いに参考になった。 ・知らない土地で、初めて農業に従事するという決断はなかなか簡単にできるものではないと思うが、その後押しとなるのが地域の人のかかわりであると強く感じた。地道な努力が実を結ぶ取り組みだと思った。18 歳以下の子供の医療費が無料ということは、移住先の子育て環境にも関心が高いということから有効な政策だと感じた。 ・重要なのは、第１が農地農用地の確保、第２が農業者の確保、第３が特産ブランド化や、６次産業化による農産物加工販売などの安定した収入確保で、農業の振興において最重点項目でもあります。今後も本市の農業活性化プランにおいて、この３つの重点項目の取り組み強化により地域振興と産業振興の推進を図ることが大切であると感じた。 ・本市も大田市農業担い手支援センターの取り組みも参考にしながら農業振興策を図らなければならないと感じた。